経済哲学原理

梯　明秀著

日本評論社版

著者略歴

1902年　徳島県に生れる
1928年　京都大学文学部哲学科（社会学専攻）卒業
1959年　経済学博士

現　在　橘女子大学客員教授，立命館大学名誉教授
著　書　『物質の哲学的概念』（初版 1934年，現行版・青木書店1958年），『社会の起源』（初版 1936 年，現行版・青木書店1969年），『資本論の弁証法的根拠』（初版1948年，現行版・有斐閣1953年）『資本論への私の歩み』（初版 1954 年，現行版・現代思潮社 1960 年），『ヘーゲル哲学と資本論』（未来社 1959 年），『経済哲学原理』（日本評論社1962年），『社会科学の学問的構造』（雄渾社 1966 年），『戦後精神の探求』復刊増補版（勁草書房1975年）
論　文　「労働市場における法的人格」未完（『立命館法学』1955年）．「資本論体系の図式的解明」未完（『立命館経済学』1959年）．「経済学研究の出発点にある哲学的課題」（同1962年）．「法学と経済学との中間領域にある若干の問題」未完（同1969年）．「資本論における方法と世界観」未完（同1969年）．「戦後精神とは何であったか・その一」（立命館文学 1974年）．「ヘーゲル的理性の主体的把握・上」（同1975年）．

昭和37年12月10日　第1版第1刷発行
昭和55年4月30日　第1版第10刷発行

経済哲学原理

著者　梯　明　秀

発行者　小　林　昭　一

検印
省略

発行所　株式会社　日本評論社
東京都新宿区須賀町14番地
電話　東京341—6161（代表）
振替東京0=16番
郵便番号160

印刷　港北出版印刷株式会社
製本　株式会社　精光堂

Printed in Japan
© 梯　明　秀　1962年

序文

本書の標題は「経済哲学原理」となっているが、今までに、わたしの関心の中心としてきたところは、ただ、マルクス経済学についてだけ哲学するということであって、経済哲学一般、すなわち、経済学界における過去および現在のすべての学派の思想的な諸原理を統一的に把握するというようなことは、わたしの能力の限界を超えたものである。しかし、この特殊なマルクス主義経済哲学の原理を追求することが、他の学派の諸学説の哲学的基礎づけのためにも、普遍的な意味をもちうるし、また逆に、そのような具体的普遍性にある原理こそが、マルクスをして彼固有の経済学を成立せしむるにいたった、というように考えることが、マルクス主義の立場にあるわれわれに共通した当然の信念でもありうるであろう。本書の内容は、このような趣旨のもとに編成され、しかも、その第一篇は、この編成趣旨にそうて新たに執筆されたものとして、本書の主要内容を構成する第二、第三の両篇のための序説的意味をもっている。

ところで、マルクスの経済学の体系的に完成されたものとしての『資本論』において、その哲学的原理が何であるべきかということを、問題にするとき、われわれは、その学的体系性が可能なるための根拠としての端緒的原理に、思索の焦点をあわすべきであるが、このばあい、わたしとしては、その体系的叙述の端緒としての要素的商品をもって、その体系的原理の対象化され外在化された客体的契機にすぎぬものと、考えている。いいかえれば、マルクスが、一般に経済学研究のための現実的出発点としたものを、現実的端緒として把えなおし、その主体的契機としての賃労働者の実践的な、したがって学問的な、概念的思惟の端緒をもって、『資本論』の学的体系性を現実に成立せしめた原理とすべ

きであると、わたしは理解してきているのである。それでは、このような理解が、いかにして哲学的に基礎づけられうるであろうか。この問いに答えようとしたものが、第三篇に配置した旧稿である。

しかしながら、この第三篇の論述内容を論理的に展開しうるための前提としては、賃労働者が、その現実の姿のままで表象されているだけのものとしては、不十分であって、それの概念的把握による範疇的規定が、成就されていなければならぬ。このような意図のもとに執筆された旧稿の諸断片を集成したものが、第二篇である。ここでは、マルクスの『経済学および哲学に関する手稿』だけを分析的吟味の対象としている。というのも、彼が、賃労働者をヘーゲル『論理学』の向自有の範疇によって把握しようと意図したかぎりでのみ、この『手稿』が成立することができたと、わたしは理解しているからである。しかも、青年時代のマルクスが、賃労働者を範疇的に把握しようと意図することによって、近代の経済学諸派の理論にたいする批判的研究を推進することができた、というこの事実は、後の『資本論』の体系的端緒とその哲学的原理とが、第三篇の論述内容どおりのものであることを、実証しているだけでなく、『資本論』そのものが経済哲学としてしか成立しえない学問であることを、最初から規定していたという解釈を、われわれに許すものでなければならない。

このような解釈のもとに、わたしは、経済哲学のマルクス的原理なるものを、『資本論』からさかのぼって『手稿』のうちに探求していったというわけであるが、本書の主要内容としての第二、第三の両篇、とくに前者は、この『手稿』についての一つの研究であると言われても、やむをえないものである。しかし、それは、本書に見られる特殊な意図に制約されたかぎりの『手稿』研究であって、青年マルクスの思想成長の過程において、それが関連する彼自身の前後の諸労作との比較検討によって、その成長度を測定し、段階的に位置づけるということが、主題の焦点にはなっていない。むしろ、後の『資本論』において成熟した彼の思想を、この『手稿』に押しつけるという結果になっている面さえもあるではあろう。それにしても、読者の当然ながらの期待を予想して、わたしの『手稿』研究を学界的に位置づけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るために、現段階における各国の諸研究に視野をひろめ、それらの研究水準のもつ学界的意義を、ここに問題にするとすれば、この『手稿』が一九三二年にMEGA第一部第三巻として、リャザノフによって準備され、アドラツキーによって公表される以前の、二三年のルカッチ、三二年のレーヴィットの初期マルクスの研究にまでさかのぼって、彼らの問題提起の理由から、われわれの理解をはじめねばならないであろう。

それは、ソヴエト哲学者のマルクス主義にたいする公式主義的、客観主義的な把握に満足できず、マルクス自身の青年期の学問的苦闘の跡を偲び、さらにドイツ観念論哲学の源泉的諸思想からの系譜的関連において、それを基礎づけようとする意図に出たものであった。そして、このような哲学者としての正統的態度を継承する哲学者たちは、『手稿』の公表以後において、その批判的意義を、それぞれの限界と欠陥とを露呈しながらも、その理論内容を深化し明確にしてゆくわけであるが、そのうち、ルカッチ、コルニュ、ブロツホ、ベーレンス、ハーリッヒらが、マルクスのヘーゲルへの連続性を主張するのにたいして、東独のグロップやヘップナー、ヤーンらは、その断絶を主張し、この二つの見解とのあいだに、五四年から二年間にわたる論戦が、『ドイツ哲学雑誌』において続けられたことは、すでにわが国でも紹介ずみである。この論戦の背景には、国際共産党の公認、非公認という政治問題が、すでに潜んでいたともいえようが、この政治的背景の表面化するにいたる場面は、レーヴィットおよびマルクーゼによる『手稿』解釈と、それにたいする公認哲学の機械論的な批判との、理論的対立においてであった。ここで、修正主義として批判の対象とされたところのマルクス的人間学の構想は、その後の反共的な政治運動にささえられて、それ自身の哲学的正統性を具体化する方向（なかんずく、ルフェーブル）から逸脱して、五〇年前後以降には、実存主義ないしキリスト教神学の立場からの諸研究——とりわけ、西独（メッケ、フェッチャー、ティエル、ポピッツ等の福音主義アカデミー研究団体 1952）、フランス（サルトル、メルロ・ポンティ、その他）において——を、また最近のアメリカにおける精神分析学派の立場からの諸研究（たとえば、フロム）を、発生せしむるにいたっている。これらの諸潮流は、ソヴエト、東独の客観主義的なマルクス研究にたい

する反撥を基調としており、しかも、この反撥は、ハンガリア事件 1956 を契機として、その方法論的な批判の領域を超えて、さらに、社会主義国家の現存形態への攻撃、あるいは、社会主義体制そのものの拒否にまで、転化しているのであるが、ここにいたっては、それらの原型思想であったマルクス的人間学そのものの偏向は、その極点にたっしたといわねばならぬ。そして、この偏向に対峙する他の偏向が、ソヴエトの科学アカデミー哲学研究所の『哲学史』編集者たち、および東独の党公認の哲学者たちの、教条主義そのもののうちに潜んでいることは、いうまでもない。

ところで『手稿』は、このように哲学者の側からだけ問題にされたのではなく、経済学者の側からも、当然ながら分析の対象とされねばならない文献であった。にもかかわらず、事実としては、経済学界の『手稿』にたいする関心は、哲学界におけるよりも著しく遅れており、その評価も、一般的には、なお低調であるのが現状のようである。このことは、『ドイツ・イデオロギー』におけるマルクス自身の「哲学的良心の清算」という言葉の意味についての皮相な解釈に支配されて、マルクス主義経済学者は哲学を無視してもよいとでもいうような錯覚に、ながらくおちいっていたことに由来する。そうした雰囲気のなかにあって、ローゼンベルク 1954 が、『ドイツ・イデオロギー』以前にさかのぼって『手稿』を高く評価し、その「疎外された労働」の概念のうちに、『資本論』に述べられてある資本制的取得の法則のための萌芽的思想を認識したことは、この概念についての分析の不徹底さにもかかわらず、注目すべきことである。それにしても、一八五〇年代にマルクスが『資本論』に到達するための経済学者としての研究に主力を注いだという事実は、しかし、彼が哲学することを止めたことを決していみするものではなく、そのかぎりで、『手稿』における哲学的原理は依然として彼の生涯をつらぬいて、『資本論』の体系をも可能ならしめたものと、われわれとしては考えておかねばならないのである。一般に経済学者たちの『手稿』研究は、そこにおけるマルクスの叙述のうちで、ただ経済学的実質をもつ部分のみを外面的に問題にするだけであって、むしろ、その内面の哲学的原理の把握にまで進んでこそ、はじめて、『手稿』の叙述が全体として経済学的実質をもっていることを理解しうるとすべきなのであるが、この大切

な一点を、彼らは知らないかのごとくである。そして、ローゼンベルクの『手稿』評価が、まさに、その典型であり、そして、その他の経済学者の諸研究は、ほとんどすべて、この亜流にとどまっているのでないかと思う。

要するに、以上のような、問題提起の差異と、政治的立場の対立と、それぞれの思想形態の変遷とを含んだ、学界的状況――なお『立命館経済学』（第九巻第一号）における細見英氏の詳細な叙述を参照――が、現段階における『手稿』研究の国際的概観である。ところで、このように一つの国際的な流行にあるともいうべき『手稿』研究は、どのような学問的水準にあるのであろうか。

たとえば、ソヴエトの『哲学史』第三巻（五九年）においては、『ヘーゲル国法論批判』から『手稿』にいたる初期マルクスを、「観念論と革命的民主主義から弁証法的唯物論と共産主義への最終的移行」と見たうえで、この『手稿』における「疎外された労働」の概念規定は、「私有財産の支配という条件のもとに成長した生産力による、私有財産の否定」の思想を初めて定立したものであり、したがって、すでに「弁証法的唯物論と史的唯物論の基礎を仕上げている」というように評価している。外見的に正しいこの評価は、しかし、その思想的系譜についての分析の機械論的なることによって、ただちにわれわれを裏ぎるのである。すなわち『哲学史』は、「この時代のマルクスは、まだフォイエルバッハの人間学の影響を完全に克服しておらず、その結果、史的唯物論と科学的社会主義の諸命題は、成熟したマルクス主義にふさわしくない術語で表わされている」と述べて、さらに「疎外」の概念さえも、あたかも、伝来的用語法そのままの形骸でもあるかのように見て、マルクスがこの概念に意味せしめようとする思想的内容――すなわち、科学的社会主義と史的唯物論――は、その哲学的内容とは無関係に、「尨大な事実にもとづく資料の理論的一般化」ないし「社会の現実の歴史的発展の総括」として、彼の後の経済学および歴史の研究によって、はじめて成立することができた、と主張しているのである。そして、東独のグロップ、ヤーン、ベルグナーたちの哲学的ないし経済学的な諸研究は、このようなソヴエトの客観主義的な機械論的解釈を、そのまま教条的に受けいれて、レーヴィット、マルクーゼのみなら

ず、ルカッチ、ルフェーブルをも、修正主義者として党派的に斥けているわけである。

なるほど、このような批難は、前者にたいしては確かに妥当するであろう。というのも、彼らの『手稿』解釈は、ただフォイエルバッハの「感性的人間」という場所において、ヘーゲルの「疎外の止揚」の論理を批判的に継承しただけのものと考えて、そこに確立されたとする普遍的な全体人間の立場とその商品的疎外からの人間的自己解放の論理とをもって、マルクス主義の本来的な姿であるというように主張し、しかも、このマルクス的人間学が、『資本論』叙述の根底に、その思想的原理として、なんらの規定的展開もなく横たわっているとまで、強弁しようとするものであるからである。そして、この「本来的マルクス主義」の構想が、後に反動化する諸解釈の母胎になっていることについては、前述してきたとおりである。しかし、ルカッチ、ルフェーブルにあっては、系譜的関連におけるマルクス自身の主体的立場そのものが、いっそう忠実にたどられており、しかも「疎外された労働」の概念が、ヘーゲル哲学と古典経済学との弁証法的止揚の所産として、より正確に把えられているのである。そのかぎりで、『手稿』はフォイエルバッハの立場を完全に克服していると主張することも、可能なことになっている。この点では、マルクスの主体的な思想内容の一歩一歩の成長の過程を問題にすることの重要性に、鈍感なグロップ一派の教条主義者としての機械論的な批判などの、とうてい、その足もとにも接近できない理論的に高い水準を示している。

とはいうものの、ルカッチは、青年時代のマルクスを、なおヘーゲルの枠内において見る傾向にあり、したがって、われわれ現実的人間の立場から見れば、なお一つの客観主義的な傾向を脱することができないでいる。これに比べて、ソヴエト、東独の哲学者たちの非哲学的態度を斥けるルフェーブルは、マルクスの「疎外」の概念に「真の哲学の規模と威厳とを与える」ことを期しつつ、ソヴエトのマルクス主義をば、政治的疎外を残存せしめ固定化している「官僚制度の認識体系」というように、規定している。それにしても、彼は、なお、レーヴィット的に固定化された「本来のマルクス主義」としての人間学の構想の枠内にあるかのようであり、しかも、レーヴィットならびにマルクーゼのなかに

見出されうるところの、『資本論』を「経済学的哲学」として基礎づけるという思想から、後退して、それを「科学的社会学」として基礎づけるべきことを、指示しているのである。このようにして、これらの西欧の哲学者たちを、ともかく最高の水準にあるものとしているところの、『手稿』と『資本論』との思想的連続を主張する『手稿』研究の諸潮流は、『資本論』を、主としてその商品論において理解し、「疎外」概念の具体化を、せいぜい物神化の思想にむすびつけるにとどまるか、あるいは、この水準を超えるとしても、「疎外された労働」の概念が、資本と賃労働の関係をいみし、そのかぎりで、古典経済学における剰余価値についての法則的思想を、発展的に継承するための哲学的地盤になっていることを、明確に認識していないのである。要するに、『手稿』および『資本論』の経済学的実質を全体的に把握せしむるような、具体性のある哲学思想を、そこに展開することは成就していない。いいかえれば、客観性のある主体性の立場、すなわち、本書において基礎づけてあるところの、賃労働者の哲学としての主体的立場を、原理的に基礎づけてはいないのである。

しかしながら、本書に収録されてある旧稿を執筆する時期はもちろんのこと、本書刊行のために旧稿を整理し、それに添削を加えてきた最近の年間においても、わたしは、右に述べてきた『手稿』研究における諸潮流の国際的な状況については、まったく漠然とした知識しかもっていなかったし、また、それらの思想内容を批判的に摂取するために右顧左眄する条件にめぐまれていなかった。本書刊行のことを日本評論新社と契約したのは、いまここに回想すれば、じつに一〇年前の昭和二六、七年の頃でないかと思う。以来ただちに、わたしの従来の研究的努力を本書の主題の方向に集中し、翌年からの二夏は、比叡山の釈迦堂の政所に避暑して、本書収録の旧稿のほとんど全部にたいする未定稿ないし未完稿の諸断片を書きおろし、三〇年の夏は、御嶽の山麓の王滝で、より展開された思想のための論文を執筆中に、脳障害の発作におそわれ、それ以来、研究生活は中断するのよぎない不運にあった。しかし、執筆能力、ついで読書能力のやや回復した三、四年後には、本書の刊行を期して、そのために新たに練りなおされた構想のもとに、旧稿の部分的

発表を企てつつ、その実現に専念してきたのであった。そして三五年に、この素志を編集局につたえたところ、畑中繁雄氏からの特別の評価と配慮とに浴することができ、これに励まされ、爾来今日まで二年間もかけて、未完稿の完結と未定稿への添削とに全精力をそそいできたしだいであるが、『手稿』研究の国外および国内の進展状況への気がかりと不安のなかで、ただ自分の過去の労作のいじくりにだけ、ひたすら時間をついやすほかないという情けなさは、あたかも自分の遺稿を自分で整理するかのような、心境でもあった。

このことは、ともかく、いまここに、初校および再校のゲラの校正をおわり、本書の刊行を間近かにひかえて、一〇年来の重荷をおろす思いに、心身ともに浸すことができているのである。それにしても、長期にわたった原稿の整理にあたり、引用文献の統一、その原典参照、部分的なコピー、その他の煩瑣な仕事のためには、喜里山博之氏の多大の協力をえたし、また再校には、細見英氏の校閲を受けることができたのであって、このように、両氏の貴重な労力と時間とが、本書のために費やされていることを、また同じく、編集局の畑中氏の、原稿全体にたいする綿密な点検と校閲とにおける専門家的な良心と誠実さとに、心うたれたことを、ここに併わせて、謝意をこめて記しておかねばならないのである。それにもまして感謝すべきことは、立命館学園の諸事に忙殺され、そのうえ、しばしばの病臥をよぎなくされて、わたしの仕事の遅延、非能率のために迷惑をかけることの多かったにかかわらず、また、本書の原稿が意外に尨大な分量になって引目を覚えているほどであるのにかかわらず、本書の刊行のために畑中氏の示された全般的な理解と厚情とのことである。これについての敬意を、喜びの情を披瀝して、この長くなった序文を終ることにしたい。

昭和三七年の晩秋

著　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡　例

本書の引用文の数字、漢字の頁数は、つぎに示すそれぞれの版の頁数であり、訳文に関しては、かならずしも邦訳版によっていない。なお、『経済学および哲学に関する手稿』にかぎり英語版の頁数をも記している。

ヘーゲルに関して――

『精神現象学』*Phänomenologie des Geistes.* Sämtliche Werke von Glockner, Bd. 2. 岩波書店、金子改訳版、上巻。

『大論理学』*Wissenschaft der Logik.* Sämtliche Werke von Glockner, Bd. 4. 岩波書店、武市改訳版、上巻ノ一。

『法の哲学』*Grundlinien der Philosophie des Rechts.* Sämtliche Werke von Glockner, Bd.7. 岩波書店、速水・岡田共訳版。

『小論理学』*System der Philosophie, Erster Teil, Die Logik.* Sämtliche Werke von Glockner, Bd. 8. 岩波文庫、松村訳版、上巻。

『自然哲学』*System der Philosophie, Zweiter Teil, Naturphilosophie.* Sämtliche Werke von Glockner, Bd. 9.

マルクス（エンゲルス）に関して――

『資本論』*Das Kapital.* Adoratskij Ausgabe, Bd. 1. Dietz Verlag, 青木書店、長谷部訳文庫版、第一巻。

『ヘーゲル法哲学批判序説』*Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie, Einleitung.* Marx/Engels Werke, Dietz Verlag, Bd. 1. 大月書店、マル＝エン全集版、第一巻。

『賃労働と資本』*Lohnarbeit und Kapital.* Marx/Engels Werke, Bd. 6. 大月書店、マル＝エン全集版、第六巻。

『賃労働と資本』「一八九一年版序文」*Einleitung zu Marx "Lohnarbeit und Kapital"* (1891). Marx/Engels Werke, Bd. 6. 大月書店、マル＝エン全集版、第六巻。

『経済学および哲学に関する手稿』*Ökonomisch-Philosophische. Manuskripte.* Kleine ökonomische Schriften, Dietz

Verlag: *Economic and Philosophic Manuscripts of 1844*, MOSCOW. 大月書店、マルヒン選集版、補巻の第四。——ただし、その第三ノートの最後の断片たる「ヘーゲル弁証法ならびに哲学一般の批判」Kritik der Hegelschen Dialektik und Philosophie überhaupt. のドイツ語版は、Die heilige Familie und andere philosophische Frühschriften, Dietz Verlag. である。

ところで、この『手稿』からの引用は、各断片ごとに、それぞれの標題を明記してあるが、ただ右の断片のみは、その標題を「ヘーゲル弁証法批判」というように省略してあるから注意されたい。なお参考までに、この『手稿』の内容としての各断片を、ここに列挙しておくならば、

第一ノート「労賃」Arbeitslohn, 「資本利潤」Profit des Kapitals, 「地代」Grundrente, 「疎外された労働」Die entfremdete Arbeit.

第二ノート「私有財産の関係」Das Verhältnis des Privateigentums.

第三ノート「私有財産と労働」Privateigentum und Arbeit, 「私有財産と共産主義」Privateigentum und Kommunismus, 「欲望、生産および分業」Bedürfnis, Produktion und Arbeitsteilung, 「貨幣」Geld, 「ヘーゲル弁証法ならびに哲学一般の批判」

『経済学批判要綱』*Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie* (*Rohentwurf*), *1857—1858*, 大月書店。高木監訳版、第一分冊、第二分冊、第三分冊。

目次

序文
凡例
第一篇　経済哲学のマルクス主義的な基礎づけ……一
第一章　経済哲学のための一般的序説……二
第一節　経済学者と経済哲学……二
第二節　経済学方法論と経済的世界観……六
第三節　経済史、政策論および学説史との体系的関連……一〇
第四節　経済哲学界の現状……一三
第二章　マルクス主義経済哲学の成立の必然性……一七
第一節　三つの源泉的思想の止揚における三つの論理的契機……一七
第二節　マルクス主義的思惟の概念的な自己展開としての歴史的現実の発展過程……三
第三節　『資本論』における三つの契機の相互関連と、その学的体系性……二九

第四節　社会主義的契機における経済学的契機と哲学的契機との相互滲透……三七

第二篇　賃労働者の範疇的把握……四七

緒　言　『資本論』の学的体系性とその現実的端緒の問題……四八

第一章　ヘーゲル的自己意識の唯物論化……五三

第一節　四四年『手稿』における奴隷と賃労働者との区別の思想……五三

第二節　現実的賃労働者の向自有的論理構造……六五

第三節　「完成された向自有」における所有関係の論理的規定……七四

第四節　ヘーゲル的自己意識批判におけるマルクスの方法論的意図……八三

第五節　「徹底した自然主義」のための外在化の論理……一〇四

第二章　「単なる商品人間」の論理構造……一一七

第一節　『資本論』第四章における法的人格の自己意識としての論理構造……一一七

第二節　マルクス的自己意識と生命的自己関係……一三四

第三節　欲望的人間の生産的労働者としての種属的自覚……一四九

第四節　現実的な賃労働者の貨幣による欲望的自己疎外……一六一

第五節　「単なる商品人間」としてのヘーゲル的自己意識……一七四

第三章　「単なる労働人間」の論理構造……一八九
第一節　疎外された労働の要素的形態（第一規定）と、その主体的原理（第二規定）……一八九
第二節　「労働人間」の自己矛盾の外在化としての疎外された生命的自己関係……二一九
第三節　『自然哲学』および『精神現象学』における生命概念と、その批判……二三一
第四節　人間種属の本来的な生命活動にたいするマルクス的把握……二四八
第五節　人間の全自然からの疎外（第三規定）と、それからの向自有的自己関係……二五八
第六節　人間の全人類からの自己疎外（第四規定）と本来的な精神段階の相互承認の論理……二六九
第七節　「主人と奴隷との関連」の唯物論化としての階級関係の論理……二八五
第八節　私有財産制度の概念的把握と体系的断片全体の概括……二九六
第四章　現実的な賃労働者の論理構造……三一一
第一節　資本制的私有財産の主体的把握とマルクス経済学の成立……三一一
第二節　二つの向自有的論理構造の第三者的比較……三二四
第三節　二つの向自有的契機の直接的自己統一から

相互媒介的自己統一へ ……三四六
第四節　現実的賃労働者の自己矛盾と向自有的な政治的実践 ……三五九

第三篇　マルクス主義経済哲学原理 ……三六九
緒　論　現実的端緒のための論理的な基礎づけ ……三七〇
第一章　『資本論』体系の主体的端緒 ……三八〇
第一節　現実的端緒における規定性としての普遍性と直接性 ……三八〇
第二節　純粋直接性の規定の端緒的商品への外的適用 ……三九一
第三節　賃労働者の自覚的および無自覚的な論理構造 ……四〇〇
第二章　賃労働者の定有的論理構造 ……四一〇
第四節　賃労働者の定有形態における自己運動の可能性 ……四一〇
第五節　賃労働者の内部知覚内容としての萌芽的自己矛盾 ……四一〇
第六節　疎外的定有からの自己回復としての論理的運動の体系 ……四三五
第七節　賃労働者の苦悩的実存と学問的思惟の体系的端緒 ……四四五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com